

保育相談を受ける保育者の専門性について

— 乳幼児相談事例を保護者サイドから考察することで —

Professionalism of Child Care Workers during Child Care Counseling

— Examining Consultation Cases of Babyhood and Early Childhood from the Parents' Point of View —

次世代教育学部こども発達学科

中道 美鶴

NAKAMICHI, Mitsuru

Department of Child Development

Faculty of Education for Future Generations

キーワード：保育相談，保育者の専門性，乳幼児の発達相談，保護者支援，事例検討

要旨：本研究レポートは，保育現場で保育相談を受ける保育者には，どのような専門性が必要なのかを今後探っていくために，まず実際の相談事例を分析・考察することで，その現状を明らかにしたいと考えた。筆者が所属していた心理教育相談室で担当した，乳幼児をもつ母親の事例2ケースと，勤務していた幼稚園で受けた相談事例3ケースを分析・考察したところ，園への専門的な要望もあり得ることや，相談を受けた園側の対応意図が保護者には伝わっていないことがあること，保育現場でも「受容・共感」や「逆転移」について扱う必要性があること，保育現場でよく行われる助言の効果が明らかになった。

Keywords： child care counseling, professionalism of child care workers, consultation on development of babyhood and early childhood, parental support, case examination

I. はじめに

保育現場では，年々保護者への子育て支援の必要性和期待が高まり，様々な支援が行われるようになってきた。筆者自身もかつて勤務していた幼稚園で子育て広場や子育て講座，サークル支援などに取り組んできた経緯がある。その中で，「子育てを巡る母親の悩みは以前からあったが，ここ数年，育児に悩む母親の数は（潜在的なものも含め）相当増えており，その悩みも苦しさを孕んだものに変化してきていることを感じる（中道，2005）」ようになり，苦しさを抱えた保護者から相談を受けることも増えてきた。それらの相談に対し，「保育者は，これまで保育という枠組みの中で，独自の経験を生かし，工夫して母親を支援してきたが，今日，それだけでは到底対応できないと感じる（中道，2005）。」という記述のように，相談を受ける際の専門技術が必要なることを感じるようになってきた。

また，牧野（2012）が「保育現場における子育て相談層」保護者支援のあり方」というテーマの調査研究の中で，アンケート調査の結果から，保護者支援の内容を「①『気になる子ども』をもつ保護者へのコンサルティングやガイダンス ②『気になる保護者』へのカウンセリングやガイダンス ③虐待やクレームへの対応」と3つにまとめ，「その数も内容も多岐にわたっている」と述べている。

しかし，保育者としては専門家であるが，「子育て支援に関する様々な学習の必要性，特にカウンセリングの知識や技術取得の重要性が掲げられているが，子育て支援の現場にいる保育者たちには，これが十分行き渡っているとは言えない状況がある。」と（石川ら，2005）が言うように，多くの保育者は心理相談の理論や技術を十分身につけているとは言えない。そして，筆者も保育現場でその必要性を感じてきたが，石川らも「保護者支援の方法や技術の獲得とその能力向上のため，特にカウンセリングに対するニーズが高くなっ

ている一方、その研修の機会や現場で必要とされる内容等の研究はまだ少ないのが実情である（石川ら、2005）。と問題提起している。

また、牧野は、「保育現場における子育て相談と保護者支援のあり方」を主題にした調査研究の中で、「保育者の専門性を生かして、日々の保育の中で保護者支援を続けているが、保育者の保護者に対する支援業務については、まだ十分な整理や体系化がなされていない現状であり、保護者支援をどのように受け止めて、どのように行えばよいのかという方法論について、いまだ議論の途上にあると言っている（牧野、2012）。」と述べている。

以上のような現状を踏まえ、本稿では心理教育相談室のケースと保育現場でのケースの、両方の相談事例を分析、考察することにより、保育現場で保育相談を受ける保育者には、どのような専門性が必要なかを今後探っていくために、まず実際の相談事例からその現状を明らかにしたいと考えた。保育現場で受ける保護者からの相談に対して保育者がどのように対処しているか、その問題点はどこか、どのような対処が必要かについて述べることにより、保育相談の現状を浮き彫りにしたい。

II. 研究の方法

1. 心理教育相談室の事例より

かつて筆者が所属していた某心理教育相談室で担当したケースのうち、乳幼児とその親対象のケースから、相談室で行ったカウンセリングやコンサルテーション、幼児へのプレイセラピー部分を抜粋し、保護者サイドから考察することで、保育現場に求められる専門性を洗い出す。

2. 保育相談の実際より

かつて筆者が勤務していた幼稚園において受けた相談事例を分析し、保育者の対応の中から、カウンセリングの技法を取り入れた部分を抽出することで専門性について考察する。

※取り上げたケースの対象が特定されないよう、個人情報に関する一部を変えている。

※掲載した心理相談面談の内容は、あくまで保護者が感じたものを話した内容であって、事実とは食い違う可能性が大きい。

1. 心理教育相談室の事例より

【事例1】＝園へ期待する専門性が読み取れる事例＝
〈4歳の長男が選択性緘黙かも知れないと心配する、あき男（仮名）の母親－あき男が保育園へ入園してから、2か月後－〉（3回の親子同室並行面接）

長男あき男について（母親の説明）

- ・家庭ではよく話し、遊び、はしゃぐが、園では不安と緊張が強く、無表情で友達からの誘いにも応じない。
- ・園で、保育者が誘うと一緒に遊んだり、名前を呼ばれたら返事をしたりすることもある。

3回の母親面接から

- ・母親の不安が強く、専門的な情報を集めて長男を何とかしてやりたいという気持ちが強い。
- ・専門機関に予約をしているが、気乗りがしないので断ろうと思っている。
- ・園には事情を話していて、行動療法（放課後の一定時間、保育室で保育者と遊ぶ環境を設け、園や保育者に次第に慣れていく方法――母親の説明）をお願いすると話していたが、相談室インテーカーの助言で、保育所での行動療法はしばらく様子を見てからということになり、依頼はしなかった。
- ・選択性緘黙であれば、早期発見・早期治療が大切と聞く。相談室へは、あき男の心を開放させ、不安を減らす療育やセラピーを希望する。
- ・親や周囲の、あき男への具体的な関わり方を教えてもらいたい。
- ・母親は、あき男のことを大変心配し、できるだけ早い時期に何とかしたいと神経質になっている。
- ・初対面のセラピストと話したり、一緒に遊んだりしているあき男の姿を見て、母親は、「初めて会う大人とすぐに話したり、遊んだりしたのは初めて」と驚く。

3回のセラピーから

- ・来談時、セラピストが「あき男君、カッコいい靴だね」と声を掛けると、母親が「このキャラクターが大好きなんです」と代わって答える。
- ・あき男が、プレイルームで何の遊びをしようかと棚を探していたとき、セラピストが、「高

くて取れなかったら取るから言ってね」と見守っていると、母親があき男を抱きかかえて遊具に届くようにする。

- ・あき男はセラピーの中で、セラピストの働きかけに反応し、一緒に遊んだり、園の様子を話したりする。「○○マンをやっつけるー」とはしゃぐ姿もあった。

3回で終結

- ・初対面のセラピストに心を開いて話したり、遊んだりしているあき男の姿を見て、母親が心配し過ぎかも知れないと考えるようになる。
- ・母親担当の相談員も、母親の過度の心配があき男をさらに不安にしている可能性もあると助言する。
- ・あき男に失敗をさせないために母親が先回りして助け過ぎていることを取り上げ、あき男に任せ、主体性を育てる必要があることを助言する。
- ・あき男の状況が改善されない場合には再度来談するというを確認し、母親納得のもとに一旦終結した。

〈考察〉

- ・あき男の様子から、選択性緘黙という程の重い状況ではなく、緊張の強い性格が起因していると窺えるが、心配性の母親は躍起になって何とかしたいと専門機関に予約を入れたり、相談室を訪れたりしている。あき男が通う保育所へも相談したようだが、母親を落ち着かせる助言はなく、結果的に、専門機関に予約を入れ、あき男のプレイセラピーが始まった。この場合、あき男は入園から2か月しか経っていないことや、園でも簡単な言葉を発していることから、もう少し様子を見ても大丈夫であると園側が伝えていたらどうだっただろうか。
- ・母親は、あき男が選択性緘黙なら早期発見・早期治療が大切であるとの情報を得て、保育所へ行動療法をお願いしようと考えていた。相談室へは、あき男の心を開放させ、不安を減らす療育やセラピーを希望した。また、大人のかかわり方があき男の緘黙の予後を左右すると考え、相談員にはかかわり方の助言を求めた。

母親はこれらの情報を本やインターネットで得ていた。あき男を何とかしてやりたいという思いが強く、熱心に調べたようである。たくさんの情報の中からあき男にとって必要なものを選択することがで

きるだろうか。あき男と近い場所にいる保育士が、あき男の園での姿を伝え、母親と一緒に考えていくことが必要だろう。

また、母親があき男の行動療法を園へ依頼しようと考えていたが、これらの情報が園への要望として向けられたときには保育の専門家として、あき男にとって何が必要かを適切に判断して説明し、対応することが必要であっただろう。

- ・このようなケースの場合、母親への助言も大切である。母親が過度に心配することが子どもへの不安や緊張感につながる場合、子どもに失敗をさせないように先回りして助けることで、子どもが失敗を恐れて神経質になったり、受動的になってしまったりする場合などには、母親の子どもへの接し方を巡って、子どもの育ちを念頭に話し合う必要もある。

【事例2】＝園の対応が保護者に伝わらず、不満を溜め込んだ事例＝

〈4歳長男が幼稚園で見せる衝動的な行動に対する園の対応に不満を溜め込んだ、かず男（仮名）の母親〉
(50超回の親子並行面接)

長男かず男について（プレイセラピー担当者情報・母親の説明）

- ・プレイルームでは遊具を使ってよく遊ぶが、興味の対象が次々に移り、その内プレイルームの中が遊具で雑然としてくる。
- ・物を投げたり、組んだりする操作的遊びが多く、ごっこ遊びのようなイメージや見立てを楽しむ遊びはほとんどしない。セラピストの質問に対して的外れな返事が返ってきたり、自分の感じ方を一方的に話したりすることがよくある。
- ・保育園では活発でいろいろなことに興味を示すが、周囲の状況に応じて行動することは苦手で、クラスの中で浮いている。
- ・思い通りにならないとき、衝動的な行動をすることがある。友達を蹴ったときと、噛みついた時には園から連絡があり、母親が様子を見に行った。

50超回の母親面接から

- ・園行事などで見る長男の様子が気になっているが、園の説明は納得できない。相談すれば「発達障害」という決めつけた説明が返ってくると、園に対する怒りを吐露することが多い。

- ・母親は園から「発達障害」と言われるのを受け入れたくないが、相談員に「発達障害」の特徴を質問するなど、「もしかしたらそうかも知れない」と、揺れていることも伝わってくる。
- ・長男が友達を蹴った、噛みついたと連絡があり、園へ様子を見に来るように指示された際、家でちゃんと言い聞かせるように言われた。長男に聞いても「していない」と言うだけで詳細については分からない。園へ前後の経緯を質問しても見ていないとの返事で、蹴った、噛みついたことだけしか知らされない。子どもが友達と喧嘩をしたり、失敗をしたりすることは、子どもの成長にはむしろ必要なことと理解しているが、したことのみを問題にされると、子どもの成長は望めないだけでなく、園への不信感しか残らない。
- ・園に持参していた縄跳びを壊れられて持ち帰った。母親が園へ問い合わせたが、「その場を見ていない」、「クラスの幼児に聞いてみても知らないという返事」、「長男が壊したのではないか」との説明が返ってくる。諦めて縄跳びを買い直した。

〈考察〉

- ・かず男はバス通園で、母親が園へ出向くことはほとんどない。友達を蹴った、噛みついたという報告をわざわざ電話で受け、呼び出されたことで事態がより重く受け止められてしまったことは想像できる。柏女ら（2012）は観察調査研究の中で「保育所での保育支援は送迎場面で子どもが近くにいる状況で行われることが多く、保育の中で生じた子どもの状態を報告しつつ、保育と連動・関連しながら展開されることも保育所の保育相談支援の特質である」と考察しているが、そのような状況の中で「蹴った」「噛みついた」ことが報告されたり、かず男の園での様子を日々こまめに聞いたりしていたら、母親の受け止め方は違っていたと考えられる。
- ・行事などの際に見るかず男の言動が気になるが、園が「発達障害」だと決めつけるのが不満だと話す。筆者が幼稚園へ勤務していた経験から考えて、園が決めつけた伝え方をすると考えられないが、母親にとって「発達障害」という言葉が伝えられただけでも決めつけられたと感じるのだろう。また、そのように感じる背景には、母親が「もしかしたら」

とかず男の言動に違和感を感じているということもある。かず男の言動の特徴から「発達障害」が疑われると筆者も感じるが、もしそう感じた場合でも保護者に伝えるときは相当慎重に行う必要があると考える。

保育所や幼稚園は幼児にとって初めての集団の場である。それまで家庭で家族とだけで過ごしていたときには見られなかった言動が集団の中では見られるようになる。もし、それが「発達障害」の特徴的な言動だとしたら、保護者にとってはそのことに初めて出会い、受け止めるという大きな課題を乗り越えなければいけないことになる。「発達障害」は早期発見・早期療育が大切であるとよく言われるが、保護者にとっては障害受容という大きな壁を越える必要がある非常に大変な作業なのである。

わが子の障害受容に関する研究は多く行われているが、「わが子の障害受容過程に影響を及ぼす要因」を文献的考察で行った阿南ら（2007）は、「わが子の障害を受容する過程には、様々な要因が複雑に絡み合い、単純なものではない」と述べている。複雑という言葉がかず男の母親の気持ちを表していると思う。

前述した慎重にということについて述べてみると、そのような保護者の思いに寄り添いながら、子どもの特徴的な言動については知らせ、大人の接し方を一緒に考えることから始まる。大人の接し方によって子どもの言動に変化があることが伝われば、保護者は前向きになれることが多いので、子どもや保護者と近い場所に位置する保育者が担う仕事として重要である。

- ・かず男の縄跳びが壊れたとき、母親の方から園へ問い合わせしている。園からは壊れた経緯を聞かされることはなく、壊れたことについてのみ問題としたことに母親の不満の原因があったと思われる。「蹴った」「噛みついた」と園から連絡があったときにも同じ不満が話されていた。

母親は、「いろいろなことが起きることはマイナスではないし、むしろ何かがあったときに子どもが成長してくれることを期待している」と語った。園に対して不満を感じたのは、子どもに起きたことを、子どもを育てる場である保育園としての援助がなかったと感じたからだと思われた。想像しながら、かつて保育現場で仕事をしてきた立場から、「園では子どもを育てるという視点で援助をせず、しないはずはない」という逆転移が起きそう

になる。しかし、園はそのようにしたかも知れないが、母親に伝わっていないことが、マイナス要因となったのであろうと逆転移を打ち消す。

【事例3】＝長女（8か月）の発達の遅れを、時間をかけて受け入れていった母親の事例＝

〈長女（8か月）の発達は気になるが、面接では扱いたくないと、揺れるみさ子(仮名)の母親〉

(不安が強くなったとき不定期で来談した1年間)

8か月の長女みさ子の発達

- ・毎回みさ子を伴っての来談だったので、相談員はみさ子の発達が気になっていた。
- ・みさ子は、8か月だが、ソファーに転がされていても泣くことがない、支えがないと座ってられない、寝返りしないなど発達に遅れがあるのではないかと感じていた。

母親の話から

- ・相談者がみさ子にかかっていると、母親は気にして「(おっぱいを)よく飲むんですよ」「この頃の子どもの個人差は大きいのですね」と注意を逸らせるように話す。
- ・相談者が「泣かないんですね」と言うと、母親からは「あやすとよく笑うんです」「将来はモデルかな？」などと返ってくる。明らかに問題から目をそらしているのが分かる。

面接を続ける中で

- ・みさ子が1歳になった。母親に支えられてお座りして遊ぶ姿は6～7か月の乳児のようである。
- ・「保育所へ通わせたら刺激があって発達が進むでしょうか」と母親の方から質問してきた。
- ・相談者は、「今は自宅でお母さんと二人だけだから刺激が足りないと感じておられるんですね」と母親の話について行く。
- ・母親は、「みさ子の発達がゆっくりなので、集団の中で、保育所の先生からもいろいろ働きかけてもらったら成長が早くなると思って」と、初めて発達がゆっくりだと話した。

保育所への入所を決める

- ・保育者もみさ子の発達が気になったが、そのことを性急に母親へ言わず、母親が時間をかけて受け入れていくペースに合わせて、寄り添いながら傾聴することを心がけた。
- ・母親が出した結論は、保育所入所と、市が行

う1歳半検診で相談し、その後のフォローをしてもらうということだった。

(来談時の主訴は別件であり、面接内容を簡略化している)

〈考察〉

わが子の障害を受け入れることについては【事例2】で扱ったが、【事例3】では、「障害を受け入れたくないが気になる」と揺れる母親の変化を考察した。

みさ子を出産して初めて親になったこの母親にとって、みさ子の発達は気になるが、他の子どもの発達がどうなのかということも知らないで、もしかして個人差の範囲かも知れないと考えたようである。「発達の個人差」という言葉で自分を落ち着かせようとした。そして、みさ子の問題に直面することを避けようと、安心できる面のみ話題にしようとした。みさ子の発達がゆっくりしていることは気になるが直視したくないという相反する思いが渦巻いているように感じた。

わが子の障害を受容することは親にとって越えなければいけない高いハードルである。保育現場でも、保護者の障害受容を支えるためにどのように接していけばよいかは難しい問題で、心を砕いている。

保育者が焦って保護者の心を傷つけることのないように、保護者の理解のペースに合わせて、無理なく支えていけるよう、援助力を積む必要がある。その援助力が『専門性』であろう。

2. 保育相談の実際より

【事例4】＝母親の苦しさを保育者が受け止めることで、母親が自分で対処していった事例＝

〈5歳の長女を筆頭に4人の子どもをもつ、さち子(仮名)の母親。－自分でもどうしようもない子育ての悩みをかかえ、さち子に矛先が向いていた－〉

(2年間、園生活を共にしながら)

長女さち子について

- ・情緒面、発達面でも特に大きな課題があるわけではなく、友達ともよく遊んでいるが、気持ちの表現は得意でなく、言いたいことがあっても泣いたり、拗ねたり、場を離れたりして我慢することが多かった。
- ・要領の悪さから、身の回りの始末などに時間がかかりがちで、友達から助けてもらうこと

も多い。

母親の悩み

- ・4人の子ども中で長女だけはどうしても可愛いと思えない。朝の仕度などでモタモタしていたら、他の子どもなら待てるが、長女の場合は酷く叱ってしまう。手を上げることもあり、虐待しているのではないかと自分を責める。

母親の辛さに共感する

- ・朝から長女をひどく叱り、叩いてしまった日、叱り出したら止まらなくなってどうしようもないと、自分自身を持って余す辛さを抱え、母親が職員室へ飛び込んでくる。相談室へ場所を移し、「いい母親になりたいのに、さち子さんにだけ辛く当たってしまうご自分が辛いのですね」、「だめだと分かっているけどどうしようもないから辛いのですよね」と、母親の辛さを受け止めながらしばらく話を聴く。母親は「さち子は自分の嫌な面が似ていて自分を見ているようで憎たらしくなるんです」と本心を吐露する。しばらく話を聴いていると落ち着き、「頑張ります」と帰っていく。
- ・母親は、自分を持って余したら職員室を訪れ、しばらく話して気持ちを立て直すことを繰り返した。

〈考察〉

- ・この母親がもつ4人の子どもの中でもさち子は落ち着いた性格で、人懐っこい。むしろ他の3人の方がよく動き、育てにくそうに見える。しかし、母親は、兄弟げんかをするときさち子に腹が立つ。そして、どうしようもない自分を持って余して辛いと語る。同じ自分の子どもなのに、平等に可愛いと思えない自分は母親として失格であると自分を責める。その葛藤で苦しんでいる。

園では、折に触れ母親の話を聴き、支えてきた。話を聴いていると、さち子の立場になって逆転移が起きる。しかし、同時に、自分を責めている母親の気持ちも理解できる。「だめだと分かっているけどどうしようもなく辛いのですよね」と共感する。

柏女ら(2012)の観察調査研究の中で、「保育士の意識が保護者支援にあるとき、必然的に受容や傾聴等、主として大人対象に開発されたカウンセリングやソーシャルワーク等の技術を援用していると目される場面も観察された」と明らかにされているよ

うに、保護者とかかわるときの態度は、受容的、共感的であることが多い。しかし、さち子の母親のように、子どもがかわいくないというようなケースの場合、保育者は子どもの代弁者となって逆転移が起きやすい。そして、説得や助言をしたくなる。さち子の母親はさち子が可愛いと思えないことがあるが、大切だとは思っている。親子のかかわり方を見ていればそのことが読み取れる。母親は自分の親としてのあり方と自分でもどうしようもない感情に苦しんでいる。説得や助言では解決しない問題である。母親の苦しい気持ちの部分に共感しながら逆転移を打ち消していった。

保育の場は保育の専門機関であり、相談室機能は部分的に有するが、相談機関ではない。母親からの相談に対して、受容・共感が必要な部分と、コンサルテーションの必要な部分の見極めが必要であろう。コンサルテーションということでは、保育の専門家として、多くの子どもと接している経験から情報を伝え、接し方のモデルを提示し、時には「大丈夫ですよ」と伝えることで母親に安心感をもたらす。

しかし、受容・共感に関しては、方法を理解していても、実際にできるかどうかは別の問題である。かなりの経験を積んだ専門の臨床家でも、受容・共感がいかに難しいかを知っており、「ベーシック・エンカウンター・グループ」「フォーカシング」などの研修を続けている。

保育現場で行われる受容・共感で、よく見られるのが、「辛い気持ちは分かりますが・・・」とこの後で、保育者の意見を付け足す方法である。「気持ちは分かります」の言葉で共感しているようだが、その後には付け足される言葉によって共感は打ち消される。

また、聞き手は逆転移によって意見を言いたくなる自分と葛藤することも多い。特に保育者は子どもの代弁者になりがちである。このようなことを分かった上で、保護者が本当に理解してもらったと感じるような受容・共感ができるためには、継続した研修が必要である。しかし、冒頭「I. はじめに」で述べたように、実際に保育者がこのようなことを学べる場は極めて少ないのが現状である。

【事例5】＝保護者へのアドバイスが役立った事例＝
〈4歳たか子（仮名）の幼稚園への登園渋りが始まり、
母親はどうしていいかわからず、困って園へ相談する〉
（登降園時のわずかな時間に話し合う）

たか子の様子

- ・人気者のたか子は、園で友達から遊びに誘われることが多く、たか子と一緒に遊びたい子ども同士で奪い合いになることがよくある。たか子にとってそのことが重荷になり、次第に登園を渋るようになった。

母親の変化と経緯

- ・母親は、普段からたか子に、「誰とでも仲良くしなさい」「友達の好き嫌いをしてはいけません」と言い聞かせていた。
- ・母親は登園を渋るたか子に「人気者だから嬉しいことなんだよ」「贅沢な悩みよ」とたか子を説得して登園を促していたが、一向に収まらないので、幼稚園へ相談する。
- ・園では、母親の困った気持ちを受け止めながら、「たか子さんが困った気持ちになっておられるのを、一人で抱えなくても済むように『あなたも困ってしまうよね』『たいへんよね』と一緒に抱えてやるような助言を」と、また、「誰とでも仲良くするのは難しい、喧嘩をしながら本当に仲良しの意味を理解するようになる」とアドバイスする。母親はそのアドバイスに「目から鱗でした」と納得し、たか子の辛さを受け止める言葉かけをするようになった。しばらくして、たか子の登園渋りは収まった。
- ・母親は、その時のアドバイスを他のことへも汎用し、子育てに少しでも余裕ができたと喜んだ。

〈考察〉

- ・親として子どもに言って聞かせることは当然だけれども行うし、子どもにはそうして親の考え方や姿勢が伝わっていく。たか子の母親は、人気者のたか子が登園を渋ることについて理解できなかったようである。朝、園へ行きたくないと渋るたか子の言い分を、「贅沢な悩み」と取り合わなかった。この母親は普段から、「友達の好き嫌いをしてはいけません」と言い聞かせていたので、誰からも好かれるたか子に満足していた。しかし、たか子は、自分を取り合って喧嘩が起きると、母親の言いつけ通り、自

分から誰かを選び好みできないし、どちらにもつけない、また今日も苦しくなるだろうとしんどさを感じていたと思われる。

そのようなたか子の辛い気持ちを半分背負う態度で、「あなたも大変ね」と母親が共感したことによって、たか子は理解された心強さで辛さを乗り越えることができたのだと考えられる。

このとき、たか子の母親に対して、カウンセリングの技法である「受容・共感」の態度を対処療法的ではあるが、たか子に試みるように提案した。たか子の母親は実際にたか子に試してうまくいったことから、他のことへも汎用していったと思われる。

Ⅲ. 総合考察

園へ専門的な対応を求める

かつて筆者が所属していた心理教育相談室で担当したケースからは、保護者の受け止め方が見えた。【事例1】では、あき男が選択性緘黙ではないかと心配する母親が、園に対しても行動療法を要望しようと考えていた。結果的にはその話を園へ持ち込むことはなかったが、持ち込まれたら園では果たして適切に対応できたのだろうか。対応するための専門知識が不足していることは、石川ら（2005）の研究でも述べられている。

送迎場面での保護者と保育者の接触

【事例2】では、かず男が通う幼稚園の対応に不満を溜めこんだ。園では保護者に対して、教育的に望ましいと思われる相談の受け方や助言をしたものと想像するが、保護者にはその意図が伝わらず、むしろ、保護者の意向が理解されないことへ不満を感じている。保育の現場では送迎場面での保護者とのかかわりを大切にしている。送迎場面を利用して、保育の中で起きたエピソードなどを伝えながら、信頼関係を築き、子どもの成長を見据えた保護者連携が促進されるようにする。日々のそのかかわりがあってこそ本音で話し合うことが可能になってくる。かず男の母親は、保育者との信頼関係がまだ築けてなく、かず男の園の様子もほとんど聞かされていない時期にいきなり電話で呼び出されたため、驚きと共に、理解できなかったのではないだろうか。そして、田代ら（2009）が述べる、「子どものため」という視点が曖昧だったために、園から報告された「蹴った」「噛みついた」という事柄が保護者にはインパクトが強く、かず男のためには今

後どうしていくかという建設的な話し合いに至らなかったのではないと思われる。

保護者の障害受容

また、保護者の障害受容に関しては、保護者の気持ちの準備が全くない段階に、園が話の中で「発達障害」という言葉を出したため、かず男の言動からもしかしたらという気持ちはありながらも、園への怒りとして転嫁されてしまったと考えられる。「発達障害」は早期発見・早期療育が大切であるということから、園は早く保護者に知らせたいという思いがあるが、タイミングを逸しては、保護者が後ろ向きになってしまう。現場でそのような例に何度も出会った。まず子どもの気になる言動とそこかわり方を話題にし、保護者の理解のペースに寄り添いながら、田代ら（2009）の言う「子どものため」を一緒に考えるスタンスでかわっていく必要がある。

【事例3】は、みさ子の母親が時間をかけてゆっくりとわが子の障害を受け入れていった過程である。保育現場でも、保育者が焦ることなく保護者に寄り添い、障害受容を支えていくという、保護者支援に関する専門性が求められるが、実際にはまだ課題が多いのが現状である。

受容・共感

【事例4】のさち子の母親は、子育てをめぐる苦しさを持って余っていた。4人の子どもの中でさち子だけが可愛いと思えないという辛さは誰にでも言えることではないが、信頼関係が築けたさち子の園になら話せた。園では、「だめだと分かっているけどどうしようもなく辛いですよね」と母親の辛い気持ちの部分に共感しながら聴く。さち子にだけ辛く当たってしまうという事柄の部分には焦点を当てない。母親は、辛い気持ちを理解されて何とか自分を維持することができていた。

逆転移との葛藤

さち子の母親の話をさち子の立場で聴いてしまったら非常に残酷で、共感も難しいだろう。さち子の気持ちを代弁したくなり、いわゆる逆転移が起きる。それどころか説得や助言をしたくなり、保育者の意見を言いたくなる。さち子の母親の苦しさを心から受け止めるには説得や助言が邪魔になると気付いたときに、聴き手自身の逆転移との葛藤が始まる。

保育者自身の逆転移に気づき、保護者が本当に理解

してもらったと感じるような聴き方ができるようになるためには、継続した研修が必要だが、実際に保育者が学べる機会は極めて少ないのが現状である。

保護者へのアドバイス

【事例5】のたか子の母親は、たか子が登園を渋ることが理解できなかった。多くの友達から引っ張りだこになるほど人気があるのに登園したくないと渋るたか子を「贅沢な悩み」と取り合わなかった。たか子の気持ちが理解できずどうしていいかわからないと訴える母親に対して、コンサルテーションを行った。大人に対するカウンセリングの技法である「受容・共感」の態度でたか子の辛さを分けて担うことを提案した。母親はたか子にそのことを試み、たか子は母親という理解者を得たことで、苦しさを抱えながらも登園できるようになった。そして、子育ての他の場面でも汎用できたことから、母親は「子育てに少し余裕ができた」と話したのだと思われる。

子育て広場で実施した保護者対象のアンケートでも、子育てに関するアドバイスが欲しいという記述が多くある。保護者へタイミング良く、子どもを育てるという視点から、提案という形でアドバイスをしたとき、実行してみてもうまくいけば保護者の力として蓄積されていくのだと思う。

保育現場では子育て支援の必要性と期待が高まり、様々な支援が行われるようになってきた。特に、「保育者たちのカウンセリングに対するニーズは高く、年齢や勤務年数、役職にかかわらず求められている。（石川ら、2005）」本稿では、相談事例を考察することで、実際の保育現場でどのような保育相談が行われているのか、その現状を一部分ではあるが浮き彫りにしようとした。

その結果、保育現場では子育てにまつわる様々な相談のニーズがあった。そして、相談した保護者が問題を解決したり、不満を残したりしている。それぞれのケースでどのような相談が行われ、保護者がそれをするように受け止めたかを整理することによって、今後示唆するものが明らかになった。今回の結果を踏まえ、引き続き保育相談を受ける保育者の専門性について検討していきたい。

引用・参考文献

阿南あゆみ・山口雅子（2007）、「わが子の障害受容過程に影響をおよぼす要因の検討：文献的考察」、産業医科大学雑誌、29-2、pp183-195

- 石川陽子・井上清子・会沢信彦 (2005), 「子育て支援とカウンセリング (1) - 保育者のカウンセリングに対するニーズを中心に」, 文教大学教育学部『教育学部紀要』, 39, pp51-62
- 柏女霊峰・有村大士・永野咲・橋本真紀・伊藤嘉余子・西村真実・水枝谷奈央・山川美恵子・高山静子・三浦淳子・天野珠路 (2012), 「児童福祉施設における保育士の保育相談支援技術の体系化に関する研究 (2) - 保育所保育士と施設保育士の保育相談支援技術の抽出と類型化を中心に -」, 日本こども家庭総合研究所紀要, 47, pp63-85
- 香曾我部 琢 (2011), 「保育者の専門性を捉えるパラダイムシフトがもたらした問題」, 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 59, pp53-68
- 牧野桂一 (2012), 「保育現場における子育て相談と保護者支援のあり方」, 筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要, 7, pp179-191
- 中道美鶴 (2005), 「“子育て講座”を実施して - 母親の育児不安と幼稚園における支援 -」, Bulletin of Shinri-Kyoiku Counseling Clinic at Okayama University 「心理・教育臨床の実践研究」, 4, pp69-76
- 斎藤幸子・須永進・青木知史・山屋春恵 (2012), 「保護者のニーズとその対応 保育所と幼稚園における調査結果の比較」, 日本子ども家庭総合研究所紀要, 47, pp329-336
- 田代和美・松村正幸 (2009), 「育ちを支える 保護者と保育者の人間関係」, 演習 保育内容『人間関係』, 建帛社